慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（上）
Sub Title	Robert Owen and William Godwin (I)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.1 (1965. 1) ,p.20(20)- 37(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19650101-0020
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（上）

白井厚

一、オウエンの思想形成
二、「新社会観」における性格形成原理
(1) 性格形成原理の基本性格
(2) 環境論による社会批判
a、経済批判　b、法律・刑罰批判　c、宗教批判　d、国家観
(3) 利己心・盲目的利潤追求批判
(4) 教育論、生産と教育の結合

一　オウエンの思想形成

ロバート・オウエンは思想家というよりは実際家であり、学問の体系をつくるよりは理想を計画し実践することにその生涯を捧げたので、その思想の形成過程を明らかにすることは容易ではない。その中心思想をなす性格形成原理についても、たとえばその自伝において、「およそ人間が、未来を通じて、人類の普遍的幸福のためになしてきた最大の発見は、次の、実践のための諸事実についての知識である――『つくられたものはつくったものからその一切の性質を受け、創造されたものはその創造者から一切の性質および力をうける』と。」というように、発見に力点を置いてその発見過程は明らかにしていないのである。だが一方、一八一六年の *An Address delivered to the Inhabitants of New Lanark* においては、彼自身次のように述べた。

「この実際的制度の基礎となっている諸原理は、新しいものではありません。古代の賢者や近代の著作家の中には、これらの原理のうちあれこれを説いたり、あるいはあれこれを部分的に組合わせて、それを人類にすすめてくれた人もいるわけです。しかし、諸原理をこのようなかたちで綜合した人はまだいないと思います。しかもそれら全部がともに実際化されるのでなくては、以上の諸原理が人類に有益なものとならないことは確実です。ところで、現代はこういう条件をみたして、これらの原理をまちがいなく実現できる歴史上最初の時代であると私は信じています。[1]」

ここにおいて明らかなように、諸原理の綜合はうたがいもなく彼のものであり、その勇敢な実際化の努力は余人の追随を許さないものであるが、その原理一つ一つは決して新しいものではない。特に彼の誇る性格形成原理といえども、もちろん彼の独創的な発見ではない。それは啓蒙思想においてはかなり一般的な考えであって、先ずデカルトの生得観念を否定したロックは白紙（tabla rasa）説をとって、すべての知識の動機となる観念は後天的に経験によって与えられることを主張してイギリス経験論を確立し、*Some Thoughts concerning Education*, 1963. においては、子供の心を水のように誘導自在なものと考え、心の発達にたいする経験の役割を強調し、人間形成のための教育の意義を力説した。経験論はフランスに導入されてコンディヤック、ボネ、ダランベール、コンドルセの感覚論となり、エルヴェシュス[2]によって倫理の分野に適用され、ラ・メトリ、ドルバック、ビュフォン、ロビネ、ディドロなどの機械論的唯物論となり、さらに再びイギリスに逆輸入されて、ベンサムの快楽的功利主義、ゴドウィンの理性的功利主義などを生み出したのである。経験論の流れを汲むスミスは、哲学者と街の荷運び人の差を、生来の素質よりは後天的な習慣、教育に求め[3]、自由平等、人権を主張したアメリカの独立宣言、

フランスの人権宣言なども、環境の改善による人間性の向上を自明の前提としていた。

オウエンの思想は、このようなイギリス経験論、フランス唯物論という啓蒙思想の潮流の中にあり、ベンサム、リカードゥ、ゴドウィン、フランス百科全書派、ルソー、そして彼自身は否定するがキリスト教神学などが影響して、形成されたものであろう。[4] 彼の伝記[5]を見ると、七歳で初等教育を終ったあと、彼は二年ほど助手兼助教師として学校に残り、手当り次第に読書をして、町の牧師、医師、弁護士たちの蔵書はみな彼に解放された。[6] また、マクガフォッグ氏の店で働いていた時には、氏のよく選ばれた蔵書を自由に使い、一日一冊、平均五時間は本を読み、公園の中でセネカを毎日書き写すなど、働きながらも非常な読書家であったという。[7] 宗教に対する批判などは、かなり早くから抱いていたと記している。ドリンクウオター工場の支配人となっていた頃には、哲学者のドゥルトン、コウルリッジなどと、化学、宗教、道徳などの問題について議論をし、Manchester Literary and Philosophical Society の一員となって、マンチェスターの各方面の学者、専門家などと交わった。ここでも多くの専門知識を得たであろうが、この頃には、この会の副会長フェリアルが何びとも自らの意志によって天才になりうると述べたのに対して論争を挑むなど、すでにかなり性格形成原理に確信を深めていたようである。従って彼の思想を形成したものとしては、初期における読書と、呉服屋の店員および紡績工場支配人としての人間観察や耳学問によるところが多いようである。その後のニュー・ラナーク工場における〝統治〟とその輝かしい成功は、もちろん彼の〝発見〟に対する自信を深め、それを実際に適用するに当っての豊富な具体例を与えるものであった。

彼の思想の直接の源泉を明らかにすることは、これだけの資料をもってしては不可能である。彼は小学校を出たのみで、ほとんど誰からも教えられることなく、彼が学んだものは全て独力により、その個人的な経験で磨かれて、彼の思想の骨肉となった。これは強さともなり弱さともなって、[8] 彼の生涯を貫いた。だがこのような個人的体験を骨肉化するために、なお何らかの思想体系が採り入れられているであろう。ふつうにはそれはベンサムと考えられるが、本稿では特にオウエンの思想構造とゴドウィンとの関連をとり上げ、[9] オウエン理解の一助に資したいと思う。

(1) R. Owen, *An Address to the Inhabitants of New Lanark*, in *Everyman's Library, A New View of Society and other Writings*, 1927, p. 111. 渡辺義晴訳、明治図書「社会変革と教育」所収、一九六三年、三三ページ。訳文は必ずしも訳書によらない。

(2) エルヴェシュスの研究者カミングによれば、「エルヴェシュスがベンサムとゴドウィンに伝えたもの、すなわち人間は人類を変革し改良する力をもっているという信念は、次第に彼らのそれぞれの後継者であるJ・ミルとR・オウエンによって採用された。」Ian Cumming, *Helvetius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, 1955, p. 82.

(3) 「人それぞれの生来の才能の相違は、実は、われわれが思ったより案外はるかに小さいものである。その成人した時に、異種の職業に従事する人々をはっきりと区別するように見える天分の著しい相違は、多くの場合、分業の原因というよりは、むしろその結果という方がいいのである。最も性格の異る人々、たとえば哲学者と街のふつうの荷運び人との間の才能の差は、生来の性質から出てくるというよりは、むしろ後天的な習い、習慣、教育から生じるのである。彼らがこの世に生まれてきたばかりの時も、それから六歳から八歳までの間も、恐らく、互いに非常に似ており、その両親でも遊び仲間でも二人の間に何ら著しい違いを認めえないであろう。」A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, ed. by E. Cannan, p. 17. キャナンはここで、この見解は Harris, *Money and Coins*, pt. I, § 11. と反対で、ヒュームの *Of the Original Contract*, in *Essays, Moral and Political*, 1748, p. 291. に従っていると述べている。

(4) 五島氏によると、「本書（「新社会観」をさす）の思想的生成について激越な反対をなす者に、彼の長子 Robert Dale Owen, Francis Place, F. Podmore 等がある。例えば R. Dale Owen は、本書を以て、要するに Paul, Calvin, Luther, Hobbes, J. Priestley, Godwin, Rousseau 等々の先人の見解の粗雑な独断的な集大成乃至再組織を、熱意と、New Lanark の実験で、色彩づけた見解にすぎぬ。『新』見解といひがたいと攻撃する。又 Place の如き更に辛辣だ。事実、本書を流るる色彩や行論が、如上の人々のはもとより、あまりに Benthamism 的である点や、第四論文には明らかに Francis Place の加筆を見、其他 James Mill の援助等も事実なのである。」五島茂「ロバアト・オウエン著作史」昭和七年、二四ページ。

(5) オウエンの伝記は産業革命期の風雲児の生涯を描いてまことに興味深く、また資料的価値も高いが、批判も多いことに注意。たとえば、G・D・H・コールが指摘するように、「後の生涯と諸事件によって色づけられ、後年に至って成熟した観念や諸説を、明らかに青年期に形成されたものとしすぎる傾向がある。」また、ハーヴェイによれば、「不幸なことに、彼の子供時代の記録は、オウエン自身が残したものだけである。そして、オウエンは非常に尊敬すべき人として際立っているとはいえ、彼自身の生涯を書いたり語ったりする時には、公平とはみなしがたい。大抵の偉大な改革者のように、彼はあまり

ユーモアを理解しなかった。そのために、彼の若い頃の記録を取り上げる時には多くの留保が必要である。」Rowland Hill Harvey, *Robert Owen, Social Idealist*, 1949, p. 1.

(6) 「このことは、八、九歳の子供には大層な御馳走のようにみえる。これは、彼をマコーレイやミルと同列にする。これは、マコーレイが八歳になる前に、*Compendium of Universal History* を書き、J・S・ミルもこの年にギリシャ語、ラテン語、英語の作品の驚くべきリストを読んだことを思い起させるだろう。だがオウエンは、彼の生涯のいかなる時にも文献についての才能を示したことはないし、彼の演説も著作も彼が多くの書を読んだことを示していない。おそらく彼が書斎の人間でないことこそが、改革計画において彼を前進せしめた無上の確信を彼に与えたのである。どんな場合でも、彼は言及した書を読んだものとして論じ、後年彼が子供時代の出来事をふり返ってみて、それをその後の生涯に適するように劇化したということは、まことにありそうなことである。」 *Ibid.*, pp. 2~3.

(7) 彼の読書について、ポドモアは次のように云う。

「彼がマンチェスターへ来た時には、彼の余暇は疑いもなく少なくなった。そして彼の著作は、広く読んだあともなければ、いわんや組織的な読書の形跡をほとんど示していない。彼の息子の次の説明は、このような見解と完全に一致する。『私の彼に関する最初の記憶では、彼は多読であったが、それは一、二の日刊新聞や新しい定期刊行物であった。彼は言葉のいかなる意味でも、学究の徒ではなかった。……私は彼の大きな書斎の中で、書き込みやしるしのついている本を見たことがない。』」 Frank Podmore, *Robert Owen, A Biography*, 1906, p. 109.

(8) 「彼の思想は甚だ直接的に彼の個人的な体験にもとづいていたので、彼は不撓不屈の心をもってそれを固持した。だが彼はそれらを正常に評価することを知らなかった。」 A. L. Morton, *The Life and Ideas of Robert Owen*, 1962, p. 17.

(9) 「オウエンとゴドウィンとの関連については、いくつかのオウエンの伝記で次のように指摘されている。

『『政治的正義』に通じている人は、ゴドウィンの哲学的概念と、オウエンが二〇年後に解説したものとの間の、ある時には使用された実際の言葉にまで及ぶ著しい類似を認めるだろう。』 F. Podmore, *Robert Owen, A Biography*, 1923, p. 119.

「一八一三年オウエンがロンドンに長くいた時、当時の多くの指導者に会い親しくなった。この中にゴドウィンがおり、その見解は、彼自身のそれと共通するところ極めて多い。ゴドウィンの偉大な書は、オウエンの精神を形成するに役立ったものの一つであった。」 G. D. H. Cole, *Robert Owen*, 1925, p. 112.

「オウエンの思想がゴドウィンの影響下にあることは容易に想像できるところで、『政治的正義』は彼が読んだしるしのある唯一の政治的著作である。」 M. Cole, *Robert Owen of New Lanark*, 1953, p. 27.

二 「新社会観」における性格形成原理

(1) 性格形成原理の基本性格

「新社会観」は、オウエンがその第四論文の始めに、政治の目的を最大多数の最大幸福と規定したことからも明らかなように、功利主義を基礎としている。彼はベンサムについて、「彼は全てが根本的誤謬にもとづいている法律を、この誤りを発見することなしに修正しようとする努力に長い一生を費した人で、またその故に彼の一生は、絶え間ない善意の努力の生涯ではあったが、個々の法の害悪を示してそれを救済せんとすることに費され、決して一切の法の根底を突きもしなければ、それらのものの誤謬、害悪の原因を認識もしなかった」[1] と批判しているように、完全なベンサムの弟子ではなかったけれども、やはりある程度はベンサムの影響下にあったというべきであろう。そして彼は、「新社会観」において金銭的利益を目的とすることを明言し、労働者は「富を創造するための道具」であると考え、単なる博愛主義者ではなく、合理的近代的経営者としてニュー・ラナーク工場を経営し、科学的労務管理、労働力保全のための社会政策、福祉施設、現代経営学の先駆などの実績を示した。従ってこの段階における彼の労働者に対する同情は、あくまでも進んだ資本家の立場からなされたものであり、彼らの組織的反抗を嫌い、本質的には合理的な資本主義秩序の確立のために労働者を飼いならしたのであって、彼のブルジョア的性格は疑い得ないところであろう。彼が失業を重要な問題としてとらえ、マルサスの人口論を拒否して政府による雇用の促進を説いたことは、当時としては極めて進んだ考えではあるが、これとてブルジョア的な社会政策であり、それも不況期の一時的な場合に限るものであって、資本主義的な自由放任に真向から挑戦するものではなかった。このようにして「新社会観」の中では、性格形成原理を軸として、資本家の労働者に対する配慮、労働者の勤勉と誠実、政府による

国民教育、総資本の立場からする労働力保全、不況時の一時的な雇用政策という、労資が平和共存して矛盾のない完全調和の資本主義が構想されたのである。

そして性格形成原理についてみると、この考え方は、人間形成に及ぼす外的要因を重視する点では正しく、これを無視して個人の自覚だけを説くこれまでの宗教や教育法に対しては有効な批判ではあるが、人間の対象に対する積極的な働きかけを見ない点では誤っていた。またこれは無知な大衆を単に教育の対象として考えるにとどまり、社会を無知な人間と教育者の二つに分割してしまって、大衆から多くのことを学びうることも見なかった。[2] しかも外的な環境は、単なる自然条件ではなく、まさに歴史的な生産関係であり、大衆は一定の歴史的使命をもった階級からなることを認識しなかったので、人間自体の変革能力、とくに労働者階級の自己解放能力をつかみえなかったことが、この原理の最大の欠点である。彼が労働者の救済を啓蒙に求め、国家のあらゆる宗派と党派の指導者の賛成と、政府の保護の下に新しい統治制度の樹立を期待したというような空想性も、ここから生じたものであった。

しかしながら、このようなブルジョア的性格にもかかわらず、「新社会観」の中には、単なる資本家としての合理性だけではなく、資本主義を批判し、後の共産主義に展開すべきいくつかの鋭い指摘を有していたことに注意すべきであろう。「新社会観」から「ラナーク州への報告」へというオウエンの成長は、成功せる資本家から共産主義者へという単なる変化ではなく、後者を前者の発展としてとらえるべきであるが、[3] ブルジョア的な立場の露骨な「新社会観」の中に、過渡的恐慌以後に開花すべき萌芽がすでに秘められていたのである。

(1) R. Owen, *The Life of Robert Owen, written by himself*, vol. I, 1857. 五島茂訳、一七七ページ。

(2) マルクスのフォイエルバッハに対する次の批判は、そのままオウエンにもあてはまる。

「これまでのあらゆる唯物論（フォイエルバッハのをも含めて）の主要欠陥は、対象、現実、感情が、ただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的な活動、実践として、主体的にとらえられないことである。それゆえ能動的側面は、唯物論に対立して抽象的に観念論――これはもちろん現実的な感性的な活動をそのようなものとしては知らない――によって展開されることになった。フォイエルバッハは感性的な――思惟客体とは現実的に区別された――客体を欲するが、しかし彼は人間的活動そのものを対象的活動としてとらえない。」

「環境と教育の変化についての唯物論学説は、環境が人間によって変更されねばならず、教育者みずからが教育されねばならないということを、忘れている。従って、この学説は社会を二つの部分――そのうち一つは社会の上に超越する――に分けなければならない。環境の変更と人間的活動あるいは自己変更との合致は、ただ革命的実践としてのみとらえられ、そして合理的に理解されることができる。」K. Marx, *Thesen über Feuerbach, Werke*, Bd. III, S. 5. 訳全集3三ページ。

(3) この問題については、拙稿「ロバート・オウエン関係文献と研究の動向」「三田学会雑誌」五七巻九号（一九六四年九月）参照。

(2) 環境論による社会批判

そこで「新社会観」におけるこのような資本主義批判の芽を、環境論、利己心批判、教育観において見てみよう。

先ず環境論について。機械論的な環境論には、前述のような欠陥があるとはいえ、これは悲惨な状態の原因を社会環境に求め、環境さえ改善されれば人間ははるかに進歩しうるということを想定することによって、人々の眼を単なる個人的欠陥から社会制度の矛盾に転じ、将来に明るい展望を与える大きな役割を果したのである。そして漠然とした社会環境――制度、教育、宗教、慣習などに対する批判は、やがて認識の深まるにつれて、これを規制する資本主義制度自体への批判へと進むべき道を示す。ここでは、その例として、経済、法律、宗教に対する批判をとりあげてみよう。

a、経済批判

「人口条例にもとづいてなされた最近の報告書によれば、大ブリテンとアイルランドの貧困労働階級は千五百万人を越え、

ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（上）

イギリス諸島の人口のほとんど四分の三をしめていることがわかった」と第一論文が書き出されるように、「新社会観」は労働者階級の悲惨の救済をその主な目的とし、労働者階級の犯罪をも、その無知、無教育、従って社会環境によるものとした。これは教育と啓蒙によって社会を改善するという安易な空想性を生む一方には、その注意を社会構造に向け、環境の改善↓資本主義の変革という主張につながるものである。

このように多数の怠惰な貧民が存在する理由について、彼は次のように述べた。

「それは全く、人口の非常に多くの部分が、甚だしい無知の中に成人するにまかされてきたからであり、また彼らが労働の意欲をもつようにしつけられているのに――またそのようにしつけることは容易であるのに――、有用で生産的な仕事が彼らに与えられなかったからにほかならない。[1]」

そこで

「賢明で適切な法律と訓練をもってすれば、すべての人は、彼らの生計と享楽のために必要なよりも遙かに多くのものを、もし許されるならば、生産しうるような知識と習慣を容易に獲得できよう。かくて地上の肥沃な部分においては、いかなる住民も、悪徳と悲惨の妨害をうけることなく、豊富と幸福の中で生活することを教えられよう。[2]」

ここで彼はマルサスの人口論に対する批判を展開するが、その論拠としては、同一の土地においても、聡明で勤勉な国民は、無知で悪政の下にある国民よりも多くのものを生産する、人間の食糧生産力には限界がない、化学の発達にも限界がない、海は無尽蔵の食糧源である、故に世界の人口は向う数千年間、自然に増殖することができる、ということである。

このように彼の経済批判は、労働者階級の悲惨に対する同情、その原因として無知と生産的労働の不足の指摘、政治批判、生産力の飛躍的発展への確信を基礎としている。これのみではもちろん資本主義批判として不十分ではあるが、後に労働の疎外、機械による失業、豊富の中の貧困を論ずる前提は、ここに出揃ったと見るべきであろう。

（1）R. Owen, *A New View of Society: Essays on the Formation of Character*, in *Everyman's Library*, 1927, p. 85. 楊井克己訳一三八ページ。

（2）*Ibid.*, p. 85. 訳一三八～九ページ。

b、法律・刑罰批判

このような社会批判は、次に法律、刑罰に対する批判となって現われる。政治に対しては、統治者の無知を攻撃するのみだが、現実の法律に対しては、「性格形成に対するこのような洞察をもってすれば、個人的な不快や公的な敵意を生ずべき根拠は、何も考えられない[1]」という説から、全ては環境の責任として次のように主張される。

「もしこの王国の現裁判官たちが、セント・ジャイルズ寺院の貧民と道楽者の中で――またはそれに似た境遇の中で――生まれ教育されていたとするならば、彼らは、生来の精力と能力をもっているだけに、とっくにその時の職業の頭目となり、そしてその卓越と熟達との結果として、投獄か流刑か死刑に処せられていたではないだろうか。現裁判官が施行する法律によって死刑の宣告をうけた人々のうちの誰かが、もしそれらの裁判官と同じ生立ちや教育や環境にあったとすれば、ほかならぬこのものこそ、現在の法の高位高官者に対して、同じ恐るべき宣告を下していたであろうという判断を、われわれは一瞬の躊躇もなく下すことができよう。[2]」

そこで、自分自身の性格を形成するという誤った観念が撲滅されたならば、

「次には、国家の法律を――それは主として右の誤った教説から発生し、現に全き力をもって存在し、人民にほとんどあらゆる種類の犯罪を仕込んでいるが――撤廃することである。何故なら、これらの法律は、犯罪を続々と確実に生み出すに適し、従って犯罪を生み出しているからである。[3]」

「私的ならびに公的悲惨を生み出さずにはおかないような意見や行動を発生させ、助長し、増加させるのは無知である。

また害悪が発生するや、それをつくり出した原因を除去しないで、刑罰を発明し適用するのも無知である。そして刑罰は、皮相的な観察者には、社会が蒙る害悪を減少するように見えるかもしれないが、しかし実は害悪を甚だしく増大するのである。[4]」

と主張し、そのような法律のうちで最も顕著なものとして、

「強酒類の消費を奨励する法律、国営富くじの名で貧民の間に賭博を是認し勧誘する法律や、貧民保護の名目で国の真の力を知らぬ間に害う法律や、現在の不合理な立法制度のもとでは、社会の結合を保つために絶対に必要だと考えられている刑罰法規など[5]」

を挙げている。

だがそこで考えられている改善策は、火酒生産に対する課税引き上げ、酒場の免許状の漸次回収、ビールの生産と消費に対する課税引き上げ、国営富くじの廃止、救貧法に代るべき人間性格形成のための制度の樹立というように、表面的な、微温的なものにとどまっていて、法の原理そのものに反対しながら、決して法律一般には及んでいないことを注意すべきであろう。

(1) R. Owen, *op. cit.*, p. 23. 訳四〇ページ。
(2) *Ibid.*, p. 25. 訳四四ページ。
(3) *Ibid.*, pp. 65～6. 訳一〇八ページ。
(4) *Ibid.*, p. 66. 訳一〇九ページ。
(5) *Ibid.*, p. 66. 訳一〇八～九ページ。

c、宗教批判

オウエンは、「宇宙に遍在しこれを支配する神は、明らかに、人間は無知の状態から理知の状態にまで、――その限界は人間自身定めえないものであるが――漸進的に進んでゆかねばならぬように人間をつくった[1]」というように、神の存在を認め、性格形成院には教会があるけれども、これはどちらかといえば汎神論的な神（Power）であって、現実の宗教については、一つとしてこれを認めようとはしなかった。

「世界を通じてこれまで教えられ今なお教えられている教義は、人々の間に精神的隣人愛（メンタル・チャリティ）の全き欠如をつくり出し、これを永続させざるをえないし、現にそうさせている。それらはまた、迷信と頑迷と偽善と憎悪と復讐と戦争を、そしてそれらのあらゆる悪い結果を生ぜしめる。何故なら、従来教えられてきたあらゆる体系の根本原理は、例外――それは実質的であるよりもむしろ名目的であるが――はあるにしても、次のことであったし、今もそうであるからだ。即ち、『人が功あるものとなり、永遠の報酬を受けるのは、かの特殊の体系の教義を信ずることによってである。もしそれを信じないならば、彼は永遠に罰せられるであろう。また過去数世紀間、この特殊の体系の信条以外のものを教えこまれた無数の人々もすべて、永遠の悲惨を受くべき運命に定められるに相違ない』ということである。しかし自然そのものは、その全ての業において、かかる甚だしい不条理を人間にさとらせるよう不断に働き続けているのである。……人類の悲惨がかくも広汎に生ずるに至ったのは、人類の大部分に従来教えこまれた全ての体系が含んでいる右の根本的誤謬のためである。[2]」

そこで人々は、自分自身の性格を形成するという誤った観念が撲滅された時には、国教会から、その弱点を構成しその危険をつくり出している教義を撤廃すること、良心的に同意しえない信仰告白、いわゆる宣誓（テスト）を撤廃することが、主張される。[3]

ここにおいても、国教会の制度そのものは、旧来の形式のままで最も貴重な目的を達すると云われてはいるが、現秩序を支えているキリスト教の教義が攻撃されていることに、注意すべきであろう。

(1) R. Owen, *op. cit.*, pp. 17～8. 訳三一ページ。
(2) *Ibid.*, pp. 52～3. 訳八七～八ページ。
(3) *Ibid.*, p. 67. 訳一一〇ページ。

d. 国家観

以上のような社会批判にもかかわらず、この全ての誤りは性格形成原理に対する無知によるとされているので、経済政策や法律、宗教の階級的性格はついにオウエンによっては明らかにされなかった。たとえば彼は、「社会を悩ましている現存の法律を撤廃するためには、このような不賢明な法律を漸次に廃止または修正しなければならない」と主張しつつも、「イギリス憲法は、その現在の外形においては、強制的な――または準備不十分な――改革に常に伴う害悪を生ずることなしに、これらの改革を行うのに見事に適合している」[1]と、イギリス憲法体制の中に安住していたし、特権階級の知恵の真随が、彼らの利益と社会の一般的利益を共に増進しようとする人々と誠実に協力し、国内に革命や攪乱がなしに、世界が啓蒙されることを期待したのである。[2] このように階級対立に超然としていることが、「新社会観」が支配階級や博愛主義者たちの絶讃を浴びながらも、明確な階級利益を主張したブルジョア急進主義者やプロレタリアートから非難されたことを、説明するであろう。

従って「新社会観」においては、その献辞に見られるように、救済の主体を「国家のあらゆる宗派と党派の指導者」「摂政皇太子殿下」「工場経営者」「下院議員ウィルバーフォース」などに期待したような甘さが目立つ。すなわち、

「それでは、かかる制度が国民的処置として直ちに採用されるのを妨げているものは、何であろうか。確かに、制度の実施に関する知識の一般的欠如以外の何物でもない。というのは、犯罪予防の確実な手段がありながら、イギリスの立法者がそれらの手段が明らかになり次第それを国民同胞に適用せずに、久しく差控えておくであろうと想像することができるであろうか。否、君主も大臣も議会も、教会や国家のいかなる党派も、そのような極悪不正の主義にもとづいて行動する傾向を是認することはないだろうと私は確信する。実行可能な改善手段が彼らに対して説明され、しかもそれらの手段が国家の安全を脅かすことなく採用されうる場合には、彼らは多くの場合、帝国人民の状態を改善せんとの真剣で熱心な欲求を従来表明してきたではないか？[3]」

「いかなる独立社会の政府も、その社会の人々を最善の性格にも、また最悪の性格にも、形成しうるものだ。[4]」

「そこでイギリスの政府と議会と国教会と国民とが、心から協同し一致の行動をとって、彼ら自身と世界の将来の幸福のための、広汎かつ強固な基礎を樹立することが、確かにすべての合理的人間の、人類のすべての真の友の、願望でなければならない。[5]」

そして国民教育制度の樹立、全労働階級の教育、不況期における犯罪と悲惨を防止するために、全求職者を直ちに雇用できるような、真に国民的効用をもつ恒久的な仕事が、国家によって直ちに整備されるよう要求されている。このような国家や支配階級に対する絶大な信頼感は、のちに政治運動に絶望することによって動揺するが、なお空想的社会主義の大きな特徴をなすものであろう。

(1) R. Owen, *op. cit.*, p. 66. 訳一一〇ページ。
(2) *Ibid.*, p. 19. 訳三四ページ。
(3) *Ibid.*, p. 36. 訳六一～二ページ。
(4) *Ibid.*, p. 64. 訳一〇五ページ。
(5) *Ibid.*, p. 80. 訳一三〇～一ページ。

(3) 利己心・盲目的利潤追求批判

オウエンはその第一論文において、高度の積極的幸福について語り、「善行に対する全ての複雑で妨害となる動機は――それはほとんど無限に増加しているが――、行為の単一の原理に帰着するであろう。その原理は、その明白な作用と能力とによって、この複雑な制度を不要にし、ついには地上のあらゆる部分において、この制度にとってかわるであろう。その原

理というのは、自分の幸福を明瞭に理解し、一様に実行するということであり、しかも自分の幸福はただ、社会の幸福を促進せざるをえない行為によってのみ達せられうるということである。……人間の個人的幸福は、彼のすべての隣人の幸福を増進し拡張しようと積極的に努力する程度に比例してのみ、増進し拡張されうる。[1]」「かかる習慣と教育とは、彼らの心に、すべての個人の――しかも宗派や党派や国や気候に対し、少しも差別することなく、すべての個人の――幸福を増進しようとする積極的かつ熱烈な願望を、植えつけるであろう。[2]」と述べ、また第二論文において、「それらの諸原理を実施することによってえられる最も重要な利益の一つは、それらの原理によって、各人は『万人に対して思いやりをもつ』ようにしむけられる有力な理由がつくりだされるであろうということである。[3]」と主張した。事実ニュー・ラナークにおける新学院（New Institution）においては、ひとり歩きできる子供はその運動場に入れられ、その時には、「遊び仲間を害うようなことをするな。仲間を幸福にするよう全力をつくせ。」という簡単な教訓を教えられ、そのような合理的な行動、利己心の否定をしつけられた。[4]「若い精神にかかる教育を受けるための十分な準備ができるや否や、教師はあらゆる機会をとらえて、各人の利益および幸福と他人のそれとの間に存在する明瞭で不可離な関係を、強調すべきである。これは全ての教育の初めであり、終りでなければならない。それは次第に生徒たちによってよく理解されるようになり、その結果、彼らはそれが真実であることについて、ちょうど数学に通暁している人がユークリッドの証明についてもっているのと同じ確信を、もつようになるであろう。そしてこれが理解された暁には、あらゆる生物の普遍的原理である幸福の欲求を、彼らは迷うことなく実践において追求せずにはおれなくなるであろう。[5]」

そして第三論文においては、ニュー・ラナークの設備の概略を示し、その意味するところの検討について、

「目前の個人的利得の道を放棄することは病的迷妄の徴候を示すものだと考えるような、単なる商業本位の人間にこれを委ねることはできない。何故なら、商業の子らは、安く買って高く売ることにその全能力を向けるように育てられてきたのであるから、この利口で高貴な技術における最上の達人にして成功者が、商業世界においては先見の明と卓越した才幹とを有するものと思われるのであるが、これに反して自分が雇用する人々の道徳的習慣を改善し、安楽を増進さすことを企てるような人々は、無謀な熱狂家だと呼ばれるからである。[6]」

そして、商業原理にもとづく人間は、法律家、政治家、征服者、宗教家、流行を追う人などと共に否定され、その検討は、環境の矛盾を認識し、真理を求め、私的善と公共善の不可離な関係を認識しうる人々の冷静で忍耐強い研究と決定に委ねられることを期待したのである。[7]

商業に対する批判は、初期の社会主義者に一般的な考えであるが、オウエンの場合は単なる商業ではなく、利己心一般を否定していることに注意すべきであろう。また盲目的利潤追求に対する批判は、総資本の立場からする社会政策として、必ずしも資本主義自体と矛盾するものではないが、オウエンの場合には単なる労働力保全効果だけでなく、あらゆる人の幸福追求、全体の利益と密接に結びつき、すでに協同主義を志向していることに注意すべきであろう。このことは、ブルジョア・イデオロギーとしての古典派経済学が利己心を前提とし、利己心の発揮にもとづく競争こそが社会進歩の原動力と考えていたのに比べて、著しい相違を示すものである。

（1） R. Owen, *op. cit.*, p. 18. 訳三一ページ。
（2） *Ibid.*, p. 20. 訳三五ページ。
（3） *Ibid.*, p. 22. 訳三九ページ。
（4） *Ibid.*, p. 40. 訳六八～九ページ。
（5） *Ibid.*, p. 49. 訳八二ページ。
（6） *Ibid.*, p. 61. 訳一〇〇～一〇一ページ。
（7） *Ibid.*, pp. 61～2. 訳一〇〇～一〇二ページ。

(4) 教育論、生産と教育の結合

オウエンの教育観は、本質的には優秀な労働力保全と階級闘争緩和というブルジョア的なものながら、教育をもって単に企業家の偏狭な個人的利益をはかるのではなく、性格形成原理による社会改革の手段として、労働者階級の貧困を救うものとして、資本主義制度の欠陥をただすものとして、極めて重要視したところに特殊な意味がある。彼は、性格形成原理によって、健全な環境を求め、特に幼児教育を重視して、一人立ちできる時から五歳までの児童を収容し、また五歳から一〇歳までの児童労働を止めさせ、無料で学校教育をほどこした。このことは、五、六歳の幼児でも一三～四時間働いていた当時としては、教育年限の点でも画期的なものである。このようにして、彼は、全国民への教育機会の拡大、権利としての無償教育、その責任を国家に求めたこと、宗教を否定した合理的な教育、処罰の否定など、近代公教育の原則をその実践の中で確立したのである。[1]

そして彼の教育内容は、先ず悲惨な環境のために荒れた生活を改善し、合理的な性格を築くことであり、そのために集団訓練と自然観察が重視される。そして一〇歳以上のものについては、夜間学校を設け、社会教育と職業教育を実施した。このような労働と教育の結合は、「ラナーク州への報告」においてはさらに進み、人々は有用労働に参加しながら知識や技術を習得するよう計画されている。かくしてマルクスは、「ロバート・オウエンについて詳しく究明しうるように、社会生産の増大のための方法としてのみではなく、全面的に発達した人間（vollseitig entwickelter Mensch）の生産のための唯一の方法として、一定年齢以上の全ての児童のために、生産的労働を教育および体育と結合するであろう将来の教育の萌芽は、工場制から発した[2]」とこれを高く評価している。オウエンの教育は、確かに優秀労働力育成策として出発したが、そこにおいて労働と教育の結合が強く意識され、社会批判、利己心の否定とあいまって、資本主義を越えた人間像を生み出すに至った。

以上のように、「新社会観」はブルジョア的性格をもちながらも、社会批判、利己心の否定、労働と教育の結合の三点において、社会主義思想へ発展する基礎をつくったのである。

（1） 最初の工場法である一八〇二年の「徒弟の健康と道徳に関する政令」（An Act for the Preservation of the Health and Morals of Apprentices）は、児童に対して毎日三時間の教育を義務づけたが、工場主はしばしばその実施をサボタージュした。工場における教師は多く老朽無能であり、学校の備品はなく、三歳以上の児童が雑居してほとんど教育効果はあがらなかった。

（2） K. Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Bd. I, Dietz, S. 509. 岩波三―二九六ページ。「ロバート・オウエンが、この世紀の十年間が過ぎると間もなく、労働日の制限の必要をただに理論的に主張したばかりでなく、一〇時間労働日を現実にニュー・ラナークの彼の工場で実施したとき、それは共産主義的空想として嘲笑された、――彼の『生産的労働と児童の教育との結合』と全く同じように、また、彼によって起された労働者の協同組合と全く同じように。今日では、第一の空想は工場法となっており、第二の空想は全ての『工場法』における公けの辞句として現われており、第三の空想はむしろ既に反動的な偽瞞の仮面に役立っている。」a. a. O., S. 314. 岩波二―二八五ページ。